



鼻腔内がん ってなに?

どんな
病気?

鼻の中にできる悪性腫瘍。

犬の鼻の中にできる腫瘍は、その多くが悪性腫瘍(いわゆるがん)です。粘膜や分泌腺から発生するケースが多く、少数ですが、骨や軟骨など深い部位で発生するケースもあります。クシャミや鼻水など、鼻炎や歯周病といった一般的な病気と似た症状が出るため、診断までに時間がかかることも。治療をしないと数ヶ月で命を落とす可能性もあるため、できるだけ早く発見し、治療することが大切です。



おもな
症状

クシャミや鼻血が初期症状。
加齢がひとつの原因に

いちばん早く気づける症状は、クシャミと鼻血、イビキの増大です。クシャミは、頭を床に打ちつけんばかりの激しさだったり、連続で出て発作だと勘違いしたりするような強いあらわれ方をすることが多いようです。鼻水は、血が混じったピンク色や細菌感染の影響で黄色や緑っぽい色になることも。発症原因はわかっていませんが、多くのがんと同様に加齢がリスクのひとつと考えられています。また、受動喫煙が影響しているという報告も。

検査・
確定診断

画像診断と鼻腔内の
生検で行います

診断はCT検査と生検で行います。鼻腔内腫瘍が疑われた場合は、まずCT検査で腫瘍の位置や大きさ、眼球や脳への圧迫などを確認します。腫瘍が確認された場合は、腫瘍の一部を採取してくわしく調べる検査(生検)を行います。腫瘍の種類や悪性度などがわかる検査で確定診断に必須です。



鼻腔内腫瘍が疑われた際に行う
鼻の開通性チェック

鼻の前にガラス板をかざし、鼻息で曇るかを確認。曇らない側の鼻が詰まっています。ただし、詰まっている即鼻腔内がんとは限らず、くわしい検査が必要です。

治療法

放射線治療が
第一選択です。

外科手術でがんを完全に取り除くことはできないため、標準治療は放射線治療です。さまざまな観点から放射線治療の技法や線量、回数を決めます。根治を目指すのが難しく、治療後1年～1年半で再発することが多いです。治療前のがんが小さいほど長期間にわたる効果が期待できるため、早期発見・治療が重要です。

病気の進行と症状の変化

初期の
症状

症状が数日続く、鼻炎に対する治療をしてもよくならない場合は鼻腔内がんの疑いも

- 大きなクシャミや連続して出るクシャミ
- 鼻血 ● 大きなイビキ ● 鼻水

注意

＼愛犬が中高齢なら鼻血を見逃さないで!／

犬の鼻血は病気やケガが隠れています。とくに中高齢の犬の鼻血は、鼻腔内がんの疑いもあるためできるだけ早く受診を。

進行に伴う
症状

がん細胞が増大して周囲へ広がると、鼻腔がふさがれて口呼吸になる、鼻の周辺や額が盛り上がるなどの症状があらわれます

- 眠れない
- 常に口呼吸をする
- 顔面が変形する
- 左右の目の位置がずれる
- 瞬膜が飛び出る



右の鼻腔に発生したがんが右目を圧迫し、目が開けにくい状態になった症例

いぬに多い病気、そこが知りたい! は「いぬのきもち」で連載中!

●こちらは、掲載した記事を再編集したものです。

アニコム損保ご契約者が
マイページから定期購読を申込むと
2号 (2ヶ月分) **無料!!**